

## 感度が問われ始めた日本の“おもてなし”

外国人は実によく歩く。

外国人といっても主に欧米系の人々のことだ。例えば毎冬、何度かスノーモンキーを見に行くのだが、その度にそう感じる。

この世界的人気者には長野県の北部、下高井郡山ノ内町にある野猿公苑に行かなければ会えないのだが、風呂に入っている姿となると冬場でなければほぼ拝めない。しかし冬場は、最寄りのバス停か駐車場から2<sup>キ</sup>ほど山道を歩かなければならない。

アップ・ダウンはそれほどないので、夏場ならハイキング気分だろう。だが、雪深く、厳しい寒さのなか、うっそうとした森の細道はツルツルに踏み固められ、少々危険を感じるほど。泣き言を言い出す日本人のカップルや子どもは珍しくない。

しかし、欧米系の人々は黙々と歩く。小さい子どもでさえ文句一つ漏らさず、1人で。そして、ユニークな猿の姿をじっくりと楽しんで、満足そうに帰っていくのだ。

もちろん、欧米系の人々全員と言うつもりはないが、彼らはこの山道をさほど苦勞に感じていない、それどころか、特別な経験のスパイスとして全てを楽しんでいるように見える。車で行ければ便利で快適には違いないが、特別な経験の輝きはあせてしまうだろう。

長野市の南、千曲市にある戸倉上山田温泉の老舗「亀清旅館」の宿主、タイラー・リンチさんに聞いたことがある。2005年に妻の実家の跡を継ぎ、若旦那として切り盛りしつつ、長野県のインバウンド発展にも積極的に活動している米国人だ。

リンチさんは言う、彼らは日本でなければ見られないもの、できない経験を楽しみに来ている、そしてお客さまのことをおもんばかりの日本人の「おもてなし」も素晴らしい。ただ「それが時に“大きなお世話”になっていないか」—。

極寒のなか、息を弾ませて会いに行くから、スノーモンキーはここ信州の、格別の思い出となる。信州でも急増する外国人観光客。この地域をもっと印象深いものとして胸に刻んでもらうには—。受け入れる側の感度もますます問われていくだろう。

信濃毎日新聞社 広告局次長兼開発部長 立岩 雅彦



長野県北部、下高井郡山ノ内町の野猿公苑のスノーモンキー